

小児外科

(スタッフ)

部長 : 伊崎 智子 (2021. 4月から)
副部長 : 坂本 浩一 (2020. 3月まで)
主任医師 : 福原 雅弘
 : 内田 康幸 (2021. 3月まで)
嘱託医 : 佐藤 (森口) 智江 (2021. 4月より休職)
専攻医 : 山口 修輝 (2021. 4月から)

2021年12月のスタッフにおいて、伊崎智子、福原雅弘は日本小児外科学会専門医です。

(診療実績)

令和2年度は4月から村守克己部長が就任されましたが、8月に退職されました。その後、坂本前副部長、福原医師、佐藤医師に加え、11月から九大小児外科より内田康幸医師を迎え4人体制での診療でした。

令和3年度は、九州大学小児外科医局出身の伊崎が部長を拝命し、任にあたりました。また同じく九大小児外科より山口修輝医師が後期研修医として就任しました。佐藤医師は産休、育休に入りましたので、3人体制で日常診療及びオンコールを行い、急患、緊急手術にも対応しております。

小児外科の特徴として、10万出生に1例程度の稀少疾患から単径ヘルニア、虫垂炎などの日常疾患まで幅広く対応が必要となります。2021年度は、4万出生に1例とされる仙尾部奇形腫の胎児診断例を経験しました。当患児においては、出生前は産科で母体管理をしていただき、腫瘍サイズから経膈出産はリスクがありましたので、予定帝王切開での分娩をお願いしました。出生後も新生児内科の先生のご協力を得ながら全身管理を行いました。幸い、全身状態が比較的落ち着いていましたので、手術室、麻酔科にご配慮いただき日齢5に腫瘍摘出術を実施しました。今後再発しないか見守り続ける必要があります。また、胎児内胎児と考えられる後腹膜腫瘍の1例も経験しました。このような稀少症例に対しても可能な限り当院で対応できるよう研鑽を積んでまいりたいと存じます。

2021年も新型コロナウイルス感染症流行のあおりは受けましたが、手術総数は253例と昨年より12例増加しました(表1)。単径ヘルニアのような待機可能な良性疾患の手術が多くを占めるため2020年の時点で延期していた症例や、病院受診控えにより外来初診が遅れた症例などが、影響したのではないかと考えています(表2)。新生児症例が22例と例年に比べ多い傾向でありました。新生児内科の先生と常に連絡をとり、対応を行っています。

少子化に伴い今後症例は徐々に減少することは否めませんが、その分1例1例の重要性が高まっています。また、社会的背景に問題点のある症例、合併症を有する症例が増加しています。患児とその家族がよりよい生活を送ることができるように、治療を行っていきたいと思います。

(研修・教育)

2021年は、大分県立病院初期研修プログラムから、研修医を4名迎えました。小児系の進路を希望されていることが多いため、なるべく初期対応、疾患の鑑別などについて学ぶことができるように考慮しています。

また、大分大学医学部の学生実習も引き受けておりますが、こちらは新型コロナウイルス感染症流行の影響を受け、2グループを受け入れるにとどまりました。

(今後の方向性)

当院は小児外科医の研鑽を積み重ね、日常疾患から新生児症例まで数多く経験することができます。山口医師は、1年の研修を終え、4月からは他院で成人外科の修練に入ります。

4月からは、将来大分の小児外科医療に貢献したいとのことで、大分大学消化器・小児外科学講座より皆尺寺悠史先生が研修に来られます。福原医師は当院で多数の症例の執刀を行い、小児外科専門医資格を得ましたが、さらに指導医資格取得に必要な症例の経験を積んでおります。

大分県での小児外科症例の多くは当院で担当しておりますので、最善を尽くせるよう精進いたします。

(文責：伊崎智子)

表1 近年の手術件数の変遷

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
手術数	319	317	284	312	266	241	253
(新生児)	13	16	13	22	9	16	22
緊急	65	61	61	70	48	62	57

(単位:件数)

表2 2021年の多かった術式
(件数:カッコ内は前年数)

腹腔鏡下单径ヘルニア手術(LPEC)	88件(70件)
腹腔鏡下虫垂切除術(Lap-A)	33件(37件)
精巣固定術	22件(28件)
膈ヘルニア手術	19件(9件)

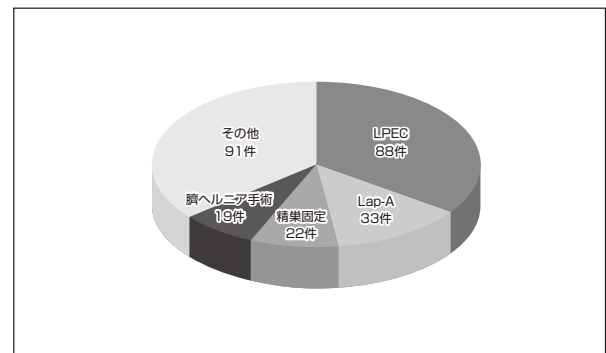


図 2021年の術式分布